

われら動物みな兄



畑 正憲著

われら動物みな兄弟



畑 正憲著

月刊ペン社



© Masanori Hata, 1969

われら動物みな兄弟

昭和四十四年三月二十一日 初版発行

定価 四八〇円

著者 畑 正憲

発行者 原田倉治

印刷所 享有堂印刷所

発行所 月刊ペン社

東京都中央区銀座東三の二

美術家会館ビル

電話・東京(03)五四一・九六六一(代)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

はじめに

螢の光、窓の雪。

つい最近まで、それでは済まされた。皓々と冴える月の光の下でも、螢の尻でまたたくケチな光の下でも、本を読むことができたろう。少し遠視気味の男ならば、一〇メートル離れたところからだって、スラスラ読み取ることができたろう。

それほど文字が大きかった。万巻の書といっても、今の印刷技術をもってすれば、ハンディな一冊の本に仕上げることもできよう。たきぎを背負いながら本を読むことができた昔の偉人は、しあわせ者である。

今は違う。とにかく、小さな活字がびっしり並んでいる。その上、テレビがある映画がある。学校を卒業し、会社勤めてやれやれと思う間もなく、やたらにマル秘と印を押した書類を読まねばならぬ。

螢の光も、印刷の光も、少しも昔と違ってはいないが、現代の本を読むには暗すぎる。フクロウにでもなつたつもりで無理を重ねると、近眼になるか、結膜炎か盲腸炎にでもなるのがオ

チである。

ものすごい情報量である。その質を問わなければ、現代の中学生は、昔の学者をはるかにしていることだろう。といって、決して偉くはない。

わたしたちは、情報量のあまりの多さにふりまわされ、自分の頭で考え、自分の目でものを観ることを忘れてしまったのではないだろうか。

抽象的な理念を頭から頭へ移すことが、教育といわれていないだろうか。

いま、一ぴきの動物が、暗闇から誕生する。触れる。見る。味わう。彼が経験できるのはあくまでも具体的なものである。

具体的なものは、それ一個を切り離して取り上げると、日常的な平凡なものに過ぎない。しかし、具体的なものが心の中に積み重なると、それは生き生きとした思想になる。

考えてもみていただきたい。まったく白紙の状態でこの世に生を受けた嬰兒は、ほぼ三歳までの間に、その性格の土台が築かれるという。抽象的な理念など、とても入りこめない年齢である。体感を通じて情報が積み重なり、たいせつなものをつくる。

わたしは、科学者のはしくれ。これまで、いろいろな動物を扱ってきた。じかに触れ、切り刻みながら確めるうちに、心に響くものがあった。その興奮を、逐一人たちに話しても、ほと

んどの場合、小首を傾げられるのが関の山、正確に反応してくれる人は少なかった。

しかし、間違っているとはとても思えない。反省しているうちに気づいた。具体的なものを直接一つずつぶつけても、分かってくれという方が無理である。それを集めて、一息に、どつと、あふれるように話さねばと思った。

この本を書いた動機はここにある。生命あるものに出会い、眺め、触れ、それをたち割ってみて感じたことを、思うままに書いてみた。

世の中に、調べて書いた本はゴマンとある。しかし、そのなんと冷たくひからびていることか。

血が通ったものを残したい。そう思って、先輩の悪口も書いた。自分の恥もさらした。生きているものを書いた本が、死んでいてはこれほどぶざまなことはない。

そんな心意気を、少しでも汲みとっていただければ、これに越すしあわせはない。

著 者

われら動物みな兄弟／目次

はじめに

I

カエル——交わりの生物学.....	11
武蔵野のカエル.....	11
短い交接期／蛙合戦.....	15
“抱き反射”と“なき反射”.....	21
ガマの油の効用／カエルの性別.....	25
カエルの寄生虫／産卵姿勢について.....	30
体外受精はつまらないか.....	34
受精の決定的瞬間とは.....	39
二万匹中のエリート・ガエル.....	43

ウサギ——妊娠・出産の生物学……………49

月明りに踊るノウサギ……………49

精子取り出しの方法……………53

ウサギの処女懐胎／孫悟空の夢……………58

長い旅・地球一周の道のり……………63

貧しい医学行政／夜間の東京無医村説……………71

ウサギの子宮は二つある……………76

紅衛兵は託児所育ち／白い巨塔の問題……………80

サル——愛情の生物学……………85

あるタイワンザルをめぐる愛と憎しみ……………85

サルの出産／親と子の認知……………90

毛皮の「刷り込み」／愛情のホルモン……………95

天皇と生物学……………100

ネズミの乳ガン／わたしの科学的自然主義……………102

CM教授と不思議な世の中……………106

思春期／雌と雄	110
サルとブルー・フィルム	117

II

動物と友人たち	123
不眠動物 日高敏隆氏	123
天才的語学の蘊蓄	
アケノチ」ウのサナキ	
マシメ動物 野村 宏氏	131
亀頭の科学	
雌雄の識別法	
ガンバリ動物 高杉 暹氏	139
夜店の風船とネズミ	
心という名のバクダン	
畏友 森下周裕君	145
戦闘的級長学生	

内実のある学問

ベストの部屋

生きものの厚いカベ

III

四季の海——未知なる世界の生きもの……………161

冬（一月）クラゲ……………164

春（五月）アメフラシ……………171

夏（六月）カラス……………180

秋（九月、十月）味覚の季節……………187

ネンブツタイを求めて——八丈日記……………195

出発まで……………196

八丈島にて……………204

あとがき

カ
ッ
ト／団
春
郎・畑
正
憲

装
丁／谷
名
洋
三

I



カエルⅡ交わりの生物学

武蔵野のカエル

もう十年以上もむかし、東大の寮にいた頃、生物同好会の発足を記念して、武蔵野の深大寺へハイキングにでかけることになった。

四月の中旬、そろそろつめ襟の制服が、うっとうしくなる季節であった。井之頭公園で電車をおり、武蔵野の面影をしのびながら、深大寺まで歩いたが、当時は車も少なく、絶好のハイキングコースであった。

幹事に、美術の好きな男がいて、飛鳥仏の拝観がスケジュールに入っていたが、寺に着いて、いくら案内を乞うても誰も出てこない。巨木に囲まれた境内にも人っ子一人いず、わたしたちはその頃流行^{はや}っていた「若ものよ」という歌を、どら声を張りあげてがなりたてた。

門前に、一軒だけ、貧しげな茶店があり、「名物」だというそばを売っている。歩いて、腹が減っていたせいでもあろう。この日のそばは素晴らしく美味かった。全員おかわりを重ねて

茶店のおやじに、ついに品切れを宣告されてしまった。

茶店の横手には大きな池があり、のそくと、真っ黒いおたまじゃくしが黒い渦をつくっている。茶店のおやじに、

「沢山おたまがいますね。三月には、ずいぶんカエルが出てきたでしょう」と話しかけると、

「出たとも。うるさくてねむれねえぐらいだ。ここは、昔からガマ寺とよばれるほど、ガマの多い所だからの」

そう言つて奥から木彫りの見事なヒキガエルを持ってきて、わたしたちに見せてくれた。それ以来数年間、ここは、わたしたちにとり絶好のカエルの採集地になった。

今年の四月。弟が車を買った。どこかヘドライブに行こうと、しきりに、わたしをさそう。それで深大寺へ連れていってもらふことにした。これまでさんざんお世話になった深大寺の池をちょっと調べてみたからである。

訪ねてみて驚いた。

かつて、歌をうたいながら散歩した広場は、駐車場になり、車がぎっしりつまっている。山門の前には、木の香も新しい茶店がずらりと並び、高級な料亭までができていた。それにあい

にく日曜日でどっと押しかけた人々が、行列をつくって名物のそばを食べていた。品切れどころか、まるで山のように積みあげられたそばのざるが、つぎからつぎへ客の前へ運ばれていく。顔なじみのおやじに、あいさつするひまさえない。

松本清張氏が、推理小説の舞台にしたのが、ブームの始まりだという。その小説が映画化されると、客の幅はさらに広まったそうだ。いまや、武蔵野の面影どころではない。ごみごみした東京の面影を偲ばせる名所になってしまった。

わたしは娘と、門前の池を丹念に調べて回った。水は、どんより濁って油を浮かべている。深さ十センチほどの池の底がまるで見えない。駄目だろうとは思いつつ、棒っ切れをひろって、表面の油をとってのぞいてみる。底には、生きもののかけらも見えず、ビニールの屑が積み重なっているだけであった。

門前を流れる小川はさすがに清流で、手をひたすと、ジンと冷たさがしみ込んできた。そおと石をめぐり、泥に指を入れる。丹念にさがしてみたが、生物の影はなかった。

カエルの卵を採集に通った頃は、越冬したヤゴたちが、小さな穴から顔をのぞかせ、静かに呼吸していたものである。手にとると、人の体温を感じるのか、モゾモゾと首をふって動き始める。池のおたまから川のヤゴへというのは、春を探るわたしのコースの一つであったが、その穴もすでに見当たらなかった。

だいたい、トンボそのものが、農薬とやらで殺されて数が非常に減ってきている。ヤゴどころか、あのしぶといドジョウですら、どんどん死んでいく。毎日食べる米は、可憐な動物たちの悲話を道連れに、豊作が続いているのである。

帰ろうと思ったが子どもにねだられて、近くの神代植物公園へ寄ってみる。ちょうど、桃の花の盛りで華やかな花のトンネルができていた。

植物はいい、ほとんど絶滅することはない。管理さえよければ、保存できる。高山植物など、目くじらたてて絶滅の危機を叫ぶまえに、誰か学者を山に追いあげて栽培することを真剣に考えるべきだと思う。山に登れば、高山植物の花畑——そんな山が、一個所ぐらいあってもいいと思う。

植物園の中に大きな池があった。馳け寄ってのぞくと、生きている音符たちが、黒い渦をつくっていた。その量は、五、六年前の深大寺門前のおたまの量に匹敵していた。ガマ寺のヒキガエルたちは、なわばりを変えて生き残っているのである。しばらく見ていたが、あまり熱心に眺めていると、人が集まってきて、すくいとてしまいかも知れない。わたしは、なつかしい友達に、慌しいあいさつを残すと、そっと池を離れた。